

要旨

都市における施設立地は、現地住民の意向だけでなく都市全体の意向も入り多数決などを経て、合意形成される。しかし、意思決定の中心となるのは現地住民でなく現地から離れた人であるケースが多い。このような合意形成の場所とその中心となる人の所在について明らかにすることを目的とする。

投票による施設立地の合意形成に関しては、投票者の志向や属性によってキャスティングボートとなる人が変化する。また、1次元線分都市モデル、2次元都市モデルではキャスティングボートを多く握る中心となる投票者とそうでない中心以外の投票者の2極化が起きる。どちらも都市の規模が大きくなるほど差が広がり、人口が増えるほど、中心以外の投票者のシャープレイ指数は0に近づいていく。また、合意形成地とそのキャスティングボートとなる人に乖離があり、「自分の住んでいる場所のことを自分で決められていない」ということを定量的に示すことができた。さらに、議決基準が上がることでキャスティングボートの一極化とその合意形成地までの乖離が大きくなることから、民主化が進む程権力の一極集中が起これり、現地住民の意向を反映し辛くなる可能性を示した。

また、市町村合併におけるキャスティングボートの変化に関して、キャスティングボートを強く握る特定の投票者は、住民が1次元線分都市モデル上では一様分布の場合、規模の大きな自治体に奪われる。つまり、市町村合併においては吸収合併が有利であることが示された。これらのモデル分析を踏まえ、幾つかの市町村合併によるキャスティングボートの変化を分析したところ、規模の大きい市がもう一つの市のキャスティングボートを奪う結果となった。しかし、人口分布や合併時の地域の位置によっては有利不利が逆転するケースも存在することから、地域にとって不可避の地理条件が施設立地の合意形成に関してアンバランスを引き起こすことを示した。

キーワード：シャープレイ指数，住民投票，合意形成，ボロノイ図，施設立地